
化学反応

壇 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

化学反応

【Nコード】

N7090E

【作者名】

壇 敬

【あらすじ】

暑い夏に出会った男と女、恋に堕ちてゆく過程は、まるで化学反応のように急速に進んでゆく。そんなひと夏の恋を綴ってみました。

酸化

夏は恋の季節。暑い日差しが狂わせる。

かたくなな心が、服を脱ぐように開放的になる。

あの時の僕もそうだった。

合コンの延長のような男女が十数人で海に遊びに行ったのだ。
その中に僕はいた。そして彼女も。

彼女は美人だったが、どこかツンとしていた。

だから男達は群がらなかった。

近寄りがたかったのだろう。

体のいい男達は、もっと受けのいい女の子達と、キャーキャー騒いでいた。

僕が来たのは数合わせなのだ。

無理矢理引っ張られただけなので、どうでもよかったのだ。

周りを見渡すと、十数人いた男女は、僕と彼女を残して、海に行つたようだ。

僕は海を見て、ボーっとしていたが、ふと気が付くと、彼女は僕を見つめていた。

その視線に、僕は釘付けになった。

彼女は、無地のグレーのワンピースの水着に、オレンジの花柄のパレオを付けていた。

そして、色の濃いサングラスをかけていた。

彼女は、僕の横に来て座った。

「あなたはあっちに行かないの？」

そう言つて、海にいる連中を指差した。

「んー、あんまり気が進まないんだ」

僕は物憂げに答えた。

「じゃあ、あたしと一緒にね」

彼女はひざを抱えて言つた。

それから、おもむろに僕の方を見た。

「あたし達、気が合いそうに思わない？」

彼女の唐突な言い回しにビックリしたが、そんな素振りを見せないように言つた。

「そうかもしれない」

心なしに彼女の口元が笑つたように見えた。

彼女はスクツと立ち上がり僕の手を引いて、僕も立つように仕向けた。

「こんなところは出ましょ」

「あたしの車でドライブしない？」

「ああ、いいね」

僕もいい加減うんざりしていたので、彼女の誘いに乗った。

水着からすっかり着替えた僕と彼女は、駐車場にいた。

彼女は、黒のミニ・コンバーチブルの運転を僕に任せて走り出した。

「どこへ？」

僕はレイバンのサングラスを掛けながら尋ねた。

彼女は海を見つめたまま言った。

「あなたに任せるわ」

「とにかく車を走らせてよ」

「この海風を感じていたい」

「OK」

そう答えて、僕はハンドルを握り直し、アクセルをオンした。

「彼女、いるんでしょう？」

「いや、残念ながら」

「そうなの」

「君は？」

「女にそういうことは訊かないものよ」

「じゃ、口説くしかない訳だ」

「ちゃんと解ってるじゃない」

しばらく走って、ドライブインに入った。

僕がタバコを燻らせていると、彼女はコーヒーを差し出した。

「ああ、ありがとう」

そう言っただけ取ると、彼女の口元に笑みがこぼれる。

「いい感じよ、あなた」

僕はフフンと笑って言った。

「どっちが口説かれてんだか」

それを聞いた彼女はフフフと笑った。

「ホントね」

「いいわよ、付き合っただけでも」

「それはそれは、光栄の極み」

僕はそう言っただけ、軽く会釈をした。

彼女には妙に受けていた。

日が傾いて、夕焼けが綺麗な岬で車を止めた。
ふたたび車を降りて、夕日を眺めた。

彼女は僕の方に寄り添った。

「ねえ、好きになっただけ？」

僕はその言葉に驚かなかった。

むしろ、僕の口から出た言葉が以外だった。

「ああ、君が好きだよ」

彼女は更に寄り添ってきた。

「嬉しい」

夏の季節に出会った恋は、熱い。

熱くて刺激的だ。

しかし、季節が過ぎると熱も冷める。

温度が下がると化学反応も止まる。

僕と彼女は…。

酸化（後書き）

よろしければ、読後感想をお願いします。

還元

熱気が残る頃、僕と彼女は、デートを重ねた。

涼しい避暑地で森を散策した。

海辺や高原でのドライブは当たり前だった。

暑い砂浜にたたずみ、海に入ったりもした。

出会った時の、他の男女がしたように。

そう、僕と彼女は特別ななんかではない。

僕と彼女は少しだけシャイなだけだった。

僕と彼女は、ひと夏の間は仲睦まじく、いつも寄り添っていた。

甘い言葉やささやきはなかった。

けれど、それに伴う行動や視線でお互いのことがよく分かった。

僕と彼女は「クール」だった。

夏の熱気が去り、街には長袖の服を着る女性を多く見かけるようになった頃、僕と彼女にも少しずつ変化が出てきた。

もちろん、夏のバカンス気分も失せて、僕も彼女も仕事で多忙な時期を迎えていた。

彼女との連絡が途切れがちになった。

当然の如く、逢う回数も減っていった。

久しぶりにフランス料理の店を予約したのだが、僕も彼女も時間には遅刻、しかも食事中に何度も携帯に会社から電話が入った。

僕も彼女も、お互いの顔を見合わせて苦笑した。

「楽しむ雰囲気じゃないわね」

「ああ、そうだね」

無言で食事を終えて、お互いの会社に戻る始末だった。

秋も深まり、全く連絡し合わなくなった頃、何かのパーティーで偶然、彼女と顔を合わせた。

「やあ」

僕はグラスを上げて、軽くあいさつをした。

「お久しぶりね。お元気？」

彼女は微妙なニュアンスの返事を、まばたきのあいさつと共に返してきた。

「あたし達、もう、終わりなのかしら？」

彼女がそんなことを訊いてくるのは意外だった。

「どうなのかな？」

僕も不思議な返事を返してしまった。
彼女は目を伏せてこう言った。

「ちょっと残念な感じがするわ」

僕もそう感じていた。
だから、こう切り返した。

「『保留』ってのはどう？」

彼女は顔を上げて僕を見つめた。

「ほりゆう？」

「そう、電話機の保留機能みたいに」

「夏までつながったまま、放って置くのさ」

僕はそう言つて、ウイंकをした。

彼女の顔に笑みが戻った。

「いいわね、それ」

「それじゃ、保留中をお願いね」

彼女は満面の笑みでそう言った。

僕は軽く会釈してこう答えた。

「承りました」

突然、彼女は僕をハグして、僕の耳元でささやいた。

「やっぱりいいわ」

「いい感じよ、あなた」

そう言い終わると、彼女は去って行った。

温度は下がったが、化学反応が終わった訳ではない。

また来年の夏、暑くなる。

その時、僕と彼女の反応は…。

暑い季節が、また僕と彼女を狂わせるのだろうか。

平衡

黒髪が肩を超えて伸びた、可愛い少女。色白のスレンダーで、華奢な感じ。清楚な印象で、成績は悪くない。フルートの高音のような声で、クスツと笑う。

中肉中背の、ごく普通の体格の少年。普通の髪型で、顔の造りに特徴は無い。純朴な印象で、成績は中の下。少し甲高い声が、時々響いたりする。

そんな少女とこんな少年とが惹かれ合う。惹かれ合うのに理由なんて無い。

そうは言っても、惹かれ合ったキツカケはある。そう、こんな印象が最初だっただろう。

「ちょっと、いい感じね」

「ちょっと、かわいいな」

時々何かの、ほんの些細なことで、彼女に、彼に、注目する。

彼女の物憂いな表情。

彼の真剣な表情。

彼女の、楽しそうに笑う顔。

彼の、戯けて笑う顔。

大したことがあった訳でもないけれど、その印象はどんどん深くなってゆく。

そのうちに、何でもないことでも、彼女のことを、彼のことを、注目してしまう。

「彼、また笑ってる」

「彼女、微笑んでる」

もう、彼女のことが、彼のことが、気になって仕方がない。

「あ、彼、こっちを見てる」

「あ、彼女、こっちを見てる」

時々、彼女の視線と彼の視線がぶつかる。お互い気まずくて視線を逸らす。

「彼、何でこっちを見るの？」

「なんか、彼女と目が合っちゃったぞ」

恋には自意識過剰なところがある。

「え？ まさか、そんなこと……」

「あれ？ ひょっとして？」

同時に、恋には疑心暗鬼なところもある。

「そんなこと、まさかよね」

「それは、それは有り得ないよな」

だが、もう既に『恋の虜』である。首までドップリと恋に浸かってしまっている。

彼女を、彼を、見る度に胸がドキドキする。

時々、彼女を、彼を、正視できなくなる。

もう想うことは、彼女のこと、彼のことだけ。そして、心にはこの言葉が響いている。

「彼女が好きだ」

「彼のことが好き」

話すチャンスを作ろうとするが、嫌われたくない、印象を悪くしたくない思いで、どうしても勇気が出ない。

この、もどかしさ。

この、じれったさ。

この、いらだたしさ。

この感情の動きが「恋の醍醐味」とは解からず、その思いを持ち続けたまま、時間だけが空しく過ぎてゆく。胸苦しさとドキドキ感を持続しながら。

そして、偶然の出来事が彼女と彼を結び付ける。例えば…。

「プール掃除の当番に当たった」

「委員会の代表に2人が選ばれた」

「図書館で2人つきりになった」

「部活で遅くなって同時に校門を出た」

「担当教師に呼ばれたのが2人だった」

まあ、何でもいいのだけど。

最初は、心臓がバクバクしてお互いに顔さえも見れない。「意味を持った」言葉を言える状態ではない。

こんなシチュエーションの何回目かの時に、事態は急変を告げる

のだ。

「花火大会に行かない？」

「見たい映画があるんだけど、一緒にどうかな？」

「コンサートのチケット、2枚あるんだけど…」

「日曜日は空いてない、かな？」

ここまでの「もどかしさ」「じれったさ」そして「いらただしさ」が楽しめないと、恋そのものなんて、とても楽しめない。

彼女が、コクリと頷く。

彼が、OKサインを出す。

その瞬間の高揚感は、言葉に言い表せられない。この一瞬のために『恋』という奴は「もどかしさ」と「じれったさ」と「いらただしさ」を提供している、と想いたくなるくらいだ。

しかし、この“*Impatience*”がいいのだ。悩み苦しみ、そして勇気を振り絞る。

いい結果だけが全てではない。結果がどうあれ、ぶつかってゆくのも青春だ。

いやあ、恋ってホント、いいモノだ、うん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7090e/>

化学反応

2010年10月10日21時54分発行